

昭和戦前期彫刻の共同制作と戦時体制

筑波大学 齊藤 祐子

昭和戦前期の彫刻界の一部では、建築と関わる総合的な創作活動に対する関心が高まり、しばしば集団での共同制作が試みられた。これまで、1926(大正15)年に齋藤素巖(1889-1974)と日名子実三(1893-1945)により結成された構造社が、彫刻を社会化することを目標として掲げて、建築と彫刻の関係を探求し、1935(昭和10)年までの前期の活動期間を通じて、展覧会場に設置される大規模な共同制作「綜合試作」ないし「綜合作」を展開したことについては言及され、近年の回顧展によりその概要も明らかになった。しかし、同時代の団体が類似の実践を行っていたことについてはほとんど知られていない。例えば、九元社(1933年結成)や第三部会(1935年結成、のち国風彫塑会と改称)などの彫刻団体や、新構造社(1936年結成)や新制作派協会(1936年結成、1939年彫刻部新設)彫刻部などが挙げられる。

これらの団体は、戦時下の社会的需用を背景として建築装飾やモニュメントの研究に力を注いでおり、第三部会時代に日名子実三が構想し、当時、国内で有数の規模を誇る建設事業として話題を呼んだ《八紘之基柱》(1940年竣工、宮崎市)は垂直線を強調した造形により重厚で堅牢な印象を与えるが、第三部会をはじめとする諸団体の展開からはモニュメンタリティー溢れる彫刻表現に関心が注がれた時代の側面が窺われる。このような動向は、同時代的により広くみれば、例えば1937(昭和12)年のパリ万博に端的に窺えるように、モニュメントの芸術性よりも、むしろその政治性が強く要請された不穏な時代状況に合致していよう。

とりわけ、当時の彫刻界において森大造(1900-1988)をはじめとする木彫家を中心に結成された九元社は、1940(昭和15)年から1944(昭和19)年まで、継続的に共同制作を実践した団体として注目される。同会は展覧会事業と並行して、しばしば建築家や造園の専門家を招いて講演会を開催するなど、社会との接点を探る幅広い活動を展開した。九元社展で発表された共同制作は試作に留まることが多かったが、個人の上では彫刻資材不足の中でブロンズに代わる新素材として注目されたセメントによるモニュメントなど社会に結実した成果を残しており、その展開は戦時下の彫刻界の動向を考察する上で貴重な研究資料を提供していると考えられる。この九元社については先行研究がほとんどなく、昭和戦前期の彫刻の諸動向の基礎研究の進展が待たれている昨今の状況を踏まえれば重要な考察対象の一つと言える。

本発表は、昭和10年代前後の彫刻界において建築と関わる総合的な創作活動に対する関心が高まり、共同制作が台頭した現象について九元社の活動を中心に考察することで、戦時下の彫刻家の活動の新たな一面を明らかにするものである。